

第5節 下北方5号地下式横穴墓出土の玉類

大賀 克彦

はじめに

下北方5号地下式横穴墓からは各種の玉類が多量に出土している。網羅的に詳細な観察および調査を行う機会を与えられたことから、それぞれの種類に関する分類的な所見を報告する。さらに、周辺地域の資料との比較から得られる考古学的含意に関しても言及した。

(1) 出土玉類の分類的検討

①翡翠製勾玉

翡翠製勾玉は7点出土している。大型品2点と小型品5点からなる。仔細に観察すると、細部の形状など多様である。

勾玉1と勾玉2は全長が50mmを前後する大型品で、ともに丁字頭勾玉である。両面穿孔で、孔径は大きく、古い特徴を残す。広義の分類では典型的なO型に帰属し〔大賀2012〕、少なくとも古墳時代前期までに製作されたものである。特に、勾玉2は頸部の屈曲が強く、丁字も磨滅して不明瞭となっている。側面には、素材を施溝分割した際の施溝痕が、研磨しきれずに残っている。古墳出土品の中に、古墳時代前期に製作された翡翠製丁字頭勾玉の模倣対象となった弥生時代中期の北部九州で製作された勾玉の伝世品が存在しているとするならば、候補となる資料の一つである。

小型品では、勾玉8が丁字頭勾玉で、古墳時代前期に製作されたO型の翡翠製勾玉である。片面穿孔で、孔径は大きい。勾玉5は丁字を持たないが、片面穿孔で、形状的にも勾玉8と類似している。古墳時代前期に製作されたO型であると考えられる。一方、勾玉9は側面が平坦で、抉りが浅い典型的な半玦形を呈する。片面穿孔で、孔径は非常に大きく、すり鉢状を呈する。半玦形勾玉としては厚みが大きくなることから、弥生時代中期の北陸西部地域で製作されたものと考えられる。勾玉7は両面穿孔で、広義のO型に帰属するが、系統や製作時期を特定する顕著な特徴を欠く。丸味が強く、半玦形勾玉とは言い難い小型の翡翠製勾玉は、北部九州では弥生時代後期以降に散見されるので、製作時期は弥生時代に遡る可能性もある。反対に、製作時期が最も新しい可能性が高いのは勾玉6である。片面穿孔であるが、孔径は大きいので、古墳時代前期に製作されたO型の範疇で理解しておく。しかし、腹部の抉り部が平坦に仕上げられており、形状的には前期末に出現し、中期に一般化するNn型に類似した形状を呈する。O型の中では最終段階に製作されたものであると考えられる。

②紫水晶製勾玉

紫水晶製勾玉は2点出土している。2点は細部の形状に相違を認めるが、法量はよく類似しており、製作時からのセットであると判断される。片面穿孔で、穿孔の開始面と到達面で孔径の差異が比較的大きい。全体的な形状や穿孔方法の特徴から山陰系〔大賀2009〕へ帰属させることが可能である。ただし、紫水晶製の勾玉は寡少な種類で、管見では、出土地の明確な事例は8古墳から出土した10点しか知られていない¹⁾。通有の水晶製勾玉と同様に理解してよいか疑問が残る。

山陰系の勾玉の中で、碧玉製および瑪瑙製は古墳時代前期後半の出現から、終末期まで製作が連続するのに対して、通有の水晶製勾玉は古墳時代中期にいったん製作が途絶することが特徴である〔大賀2009〕²⁾。それに対して、紫水晶製勾玉は3古墳から出土した5点が当該期に帰属する（写真1）。前期後半および後期後半の事例は偶発的に得られた素材を利用しただけと考えても問題ないが、中期後半は水晶が玉素材として全く利用されない時期であることから、紫水晶製勾玉の製作には何らかの意図、すなわち「紫色」という色調への指向性が存在したと想定される。現状では、山陰系から除外するには至らないが、製作地³⁾や素材としての選択理由に関してさらに検討を必要とする。

③緑色凝灰岩製管玉

緑色凝灰岩製管玉は25点が出土している。淡青緑色を呈し、風化の影響で軟質となっている。全長は12.30～19.85mm、直径は2.70～3.65mmの範囲にあり⁴⁾、やや不揃いな印象を与えるが、石材的なまとまりを考慮すれば、製作時からのセット関係を想定することができる。一端が欠損した1点を除く24点の平均値は全長14.50mm、直径3.00mmとなる。緑色凝灰岩製管玉の法量的指向性による分類〔大賀2013b〕では、典型的なものとして該当する種類は存在しない。しかし、石材的な特徴も加味して判断するならば、領域Lを指向しつつ、特に小型品として製作されたセットであると位置付けられる。この判断が妥当であるならば、前期末～中期前半に製作された畿内系のセットが伝世したものと理解される。

④瑪瑙製管玉

瑪瑙製管玉は2点出土している。鮮やかな赤橙色に発色され、透明感が強い瑪瑙を素材とする。外面は滑らかに仕上げ研磨されているが、側面と端面が形成する稜は鈍い。また、2点とも片面穿孔で、孔は比較的大く、孔径の変化があまり認められない円筒形を呈する。また、孔壁には平行する蛇腹状の回転痕が残る。以上のような石材や穿孔技法に関わる特徴は、日本列島で製作された瑪瑙製玉類とは全く異なることから、舶載された玉の一種であると考えられる〔大賀2013b〕。

下北方5号地下式横穴墓例と共に通する特徴を具備する瑪瑙製の玉類は管玉に限定される。管見では、古墳時代中期～後期にかけての24古墳から約40点の出土が認められる⁵⁾。地域的には北部九州周辺に偏り、奈良県星塚2号墳の8点を除けば、いずれも1～4点ずつ分散的に出土している。法量的には直径6～8mm、全長15～25mm程度にまとまる。穿孔は片面穿孔が卓越するが、両面穿孔も1／3程度を占めている。現状では、生産地を具体的に想定することは困難であるが、朝鮮半島南部の玉田古墳群において出土が目立つことは流通経路を判断する上で有意かもしれない。

⑤ガラス小玉・ガラス管玉

ガラス小玉は556点が出土している。刀剣に銹着している2点を除く、すべての個体に対して材質の調査を行っているので、本書第IV章第3節所収の田村報告を併せて御参考頂きたい。



写真1 大分県川部遺跡出土の紫水晶製勾玉

ほとんどを占めるのは植物灰タイプのソーダガラス (Group SIIIB) [Oga and Tamura 2013] 製で、引き伸ばし法によって製作されたガラス小玉である。コバルトで着色された紺色透明を呈する。比較的粘性が高い状態でガラス管が作出されたと思われ、気泡が両端面間を貫通するように伸長するため、孔と平行する白色の筋が目立つ。1点以外は直径が7～12mm程度の大型品である。当該の種類は中期後半に初めて出現し、流通量も極めて多いことから、時期区分の指標として重視している。端面は加熱整形による丸味を残し、研磨は認められないか、非常に微弱であり、流入からの時間経過が長くないことを伺わせる。また、1点のみ出土しているガラス製管玉は、当該の種類のガラス小玉を製作する際に、切断の間隔を長くしたものである。他古墳からの事例を含めても出土量は少なく、管玉としては全長も短小であることから、どれほど目的的に製作されているかは定かではない。考古学的な意味としては、上記のガラス小玉に準じる扱いができる。

他の種類も組成しているが、すべて数点ずつの出土数である。材質的には中アルミナタイプのカリガラス (Group PI)、ナトロンタイプのソーダガラス (Group SIA および Group SIB)、高アルミナタイプのソーダガラス (Group SIIIB) が確認できる。製作技法には引き伸ばし法、包み巻き法、連珠法が混在するが、材質と製作技法の対応関係は標準的なものである。仔細に見ると雑多な組成に見えるが、色調や法量が類似したガラス小玉が集められている。コバルトで着色された紺色透明を呈するガラス小玉がほとんどで、高アルミナタイプのソーダガラスのみ銅とマンガンで複合的に着色されていて、緑味を帯びた濃青色を呈する。上記の3種類の材質の中で、中アルミナタイプのカリガラスとナトロンタイプのソーダガラスの2種類は中期前半までに流入する種類の伝世品である。

⑥ガラス丸玉

ガラス丸玉は51点が出土している。直径は14～18mm程度で、扁球形を呈する。製作技法は二次的な融着法である。色むらや剥離の様相から、ガラス塊を多くは3段融着し、成形ののち、表面を研磨で仕上げたことが判る。材質調査の結果から、植物灰タイプのソーダガラスを主要な材料としつつも、10%程度のナトロンタイプのソーダガラスが併用されていることが推定される。形状や法量的な凝集性から、製作時からのセットであると考えられる。さほど高度な製作技法ではなく、素材となったガラスも通有の材質であることから、日本列島内部における製作も否定できない。ただし、植物灰ガラスとナトロンガラスの比率が9：1というものは、植物灰ガラスの出現以降の日本列島におけるナトロンガラスの存在比率としてはやや高い⁶⁾。また、融着法によって製作されたガラス玉の出土状況からも疑問が残る。融着法によって製作されたガラス玉の出土が一般化するのは、古墳時代後期中葉以降のことであり、それ以前に遡る資料は非常に少ないからである。

時期的に最も遡る事例は古墳時代中Ⅰ期に比定される大阪府風吹山古墳である。破碎品が多く、総数を見積ることは容易ではないが、出土数は多量である。ガラス塊を2段ずつ融着して製作されており、球形もしくは隅丸樽形を呈する。二次的な製作技法ではあるが、不規則な色むら等も乏しく、他例よりも整美な仕上がりである。紺色透明で、素材として利用されたガラスのほとんどはナトロンタイプのソーダガラスであった。現状では、日本列島内に類例は出土していない。

後続する資料としては、中期後半に比定される事例がいくつか存在する。まとまった点数で出土したのは大阪府塚廻古墳と兵庫県御旅山13号墳であり、福岡県内の奴山正園古墳および立山山12号墳でも数点ずつ出土している。いずれも材質調査は行っていないが、形状や法量が古墳ごとに異なる。以上の中で、御旅山13号墳例は下北方5号地下式横穴墓例と類似するものである。しかし、このように出土数も少なく、相互の関連性も乏しいことから、当該期の日本列島においてはまだ融着法によるガラス丸玉の二次的な製作は行

われていなかった可能性が高い。

⑦半円形ガラス製品

半円形ガラス製品は9点が出土している。平面D字形を呈する。底面がほぼ平坦で、仕上げが省略されていることから、平坦な器物の上に載せて、装飾部材として使用したものと考えられる。ただし、類例も乏しく、使用方法の詳細は不明である。紺色を呈するが、色むらが目立ち、二次的な製作技法である。内部にはヒビが多数認められ、製作時に徐冷が充分に行われていないことが窺われる。そのため、欠損している個体も多い。全体として、製作技法が高度であるとは言えない。植物灰タイプのソーダガラスを主要な材料としつつも、高アルミナタイプのソーダガラスやナトロンタイプのソーダガラスが混用されている。素材として利用されたガラスが通有のものであること、製作技法が熟練したものとは言えないこと、そもそも類例が非常に乏しい形状であることから、日本列島において製作された可能性も認めておきたい。

(2) 組成的特徴と時期比定

下北方5号地下式横穴墓からは各種の玉類が多数出土している。第一の特徴は、主要な玉類が製作時からのセット関係を維持したままで、かつまとった点数で出土していることである。緑色凝灰岩製管玉が典型的で、規格品の流通量が極めて多いガラス小玉に関しては過大評価できないが、ガラス丸玉や半円形ガラス製品も同様である。翡翠製勾玉に関しては製作時期が異なるものが組み合わされているが、埋葬時期よりもかなり古い勾玉が7点もまとまって出土していることも上記に準じる評価が可能である。第一の特徴は、当該古墳の被葬者が玉類の入手と継承の連鎖において最初の、もしくは非常に初期に位置付けられる優位な立場にあったことを反映している。

第二に、組成が時期的な様相をよく示していることが指摘できる。下北方5号地下式横穴墓出土の玉類の中で時期区分の指標としての重要性が高いのは、植物灰タイプのソーダガラス（Group SIIIB）製のガラス小玉である。当該の材質は中期後半に突然、大量に流入するが、厳密に言えば、中期後半の中では一段階遅れて出現するものと考えている。すなわち、長頸鎌と多鉢式の帶金式甲冑の組み合わせによって特徴付けられる中Ⅲ期の古墳では、まとめた数量のガラス小玉を出土した事例は少ないが、錫酸鉛を着色剤として使用した黄色不透明や黄緑色半透明を呈する高アルミナタイプのソーダガラス（Group SIIB）が新出の種類として組成に加わる一方で、中Ⅰ期～中Ⅱ期に流通していた種類がまだ大きな割合を占めて残存している。ただし、植物灰タイプのソーダガラスはまだ出現していない。典型的な事例として大阪府珠金塚古墳、福岡県奴山正園古墳、福井県天神山7号墳を挙げることができる。一方、植物灰タイプのソーダガラスが組成に加わった比較的古く位置付けられる事例としては、奈良県新沢109号墳および115号墳、大阪府藤ノ森古墳、唐櫃山古墳、塚廻古墳、和歌山県車駕之古址古墳、兵庫県宮山古墳および奥山大塚古墳、福岡県小田茶臼山古墳、石川県狐山古墳などを挙げることができる。これらの事例では、出土したガラス小玉の中で中Ⅰ期～中Ⅱ期に流通していた種類が占める割合は激減する。帶金式甲冑が共伴する場合は少鉢式となり、前記の事例より後出することは明らかである。

筆者は古墳時代の時期区分において、中期後半を長頸鎌と多鉢式の帶金式甲冑の組み合わせによって特徴付けられる中Ⅲ期と、長頸鎌と少鉢式の帶金式甲冑が組成する中Ⅳ期に二分してきたが〔大賀2002・2013a〕⁷⁾、以上の検討から、両時期は植物灰タイプのソーダガラス製の小玉の有無と対応するものと考えられる。一方、玉の組成における中Ⅳ期と後続する後Ⅰ期との相違は、山陰系に帰属する太形の碧玉製管玉

[大賀 2009] の出現⁸⁾、および軌を一にして出現する材質転換形の存在である。下北方5号地下式横穴墓の玉組成は明らかに中Ⅳ期に該当する様相を示している。

第三に、翡翠製勾玉が7点もまとまって出土し、しかも製作時期がすべて古墳時代前期以前に遡る伝世品であったことが指摘できる。翡翠製勾玉の製作は前Ⅶ期～中Ⅰ期を画期として、O型からNn型およびNw型に転換し [大賀 2012]、特に原石産地周辺の製作遺跡で製作されたことが確実な

Nn型の生産量が多い。そのため、流通する翡翠製勾玉の転換は比較的急速に進行し、中Ⅰ期～中Ⅱ期の古墳に副葬される翡翠製勾玉では既にNn型が過半を占めている [大賀 2005]。さらに時期が降る中期後半以降の古墳において、7点もの翡翠製勾玉がすべてO型となるのは偶然であるとは考え難い。一方で、同様な構成を示す事例が他にも散見される。福岡県稻童21号墳（写真2）および御所山古墳、熊本県物見櫓古墳、兵庫県宮山古墳、神奈川県日吉矢上古墳、千葉県姉崎二子塚古墳などが挙げられる⁹⁾。こうした事例が各地域における在地的な事情による個別的な伝世現象であると考えることが困難であるならば、特定の集団において一括して保管されていたものが、中期後半に分配されたものと考えられる。その集団は、古墳時代前期においてO型の翡翠製勾玉の復古再生と生産を主導し、威信財に準じるアイテムとして配布を行った倭王権以外の候補を考えることは困難である。そして、こうした様相の極端な場合として、時期的に併行する朝鮮半島南部の新羅や大伽耶における大量の出土が評価される¹⁰⁾。朝鮮半島の事例に関しては、単純な配布というよりも、日本列島内部における製作が困難な器物の獲得を目的とした威信財交換という側面が強いと考えられるが、倭王権において伝世品の翡翠製勾玉が多量にストックされていることを前提とする点で共通する。

もう一つ考えておくべき問題は、なぜ中期後半において翡翠製勾玉のストックが配布されたのかという点である。倭王権は、様々な器物とともに各種の玉類を威信財的に配布しているが、中期後半に関しては該当する種類が存在しないという点がその理由の一端である可能性は認められる。しかし、前後の時期に配布されている玉類と比較して、配布対象者が極端に限定的である¹¹⁾。すなわち、威信財的な配布の対象となるような玉類の確保が達成されていないことが、ストックを放出した原因のすべてであるとは考え難いのである。この問題に関しては、引き続き検討していく必要がある。

（3）周辺地域の資料との比較

①下北方地下式横穴墓群

下北方地下式横穴墓群では、5号地下式横穴墓を含めて7基からまとまった量の玉類が出土している。これは、内容が明らかになった地下式横穴墓の約4割に相当し、当該集団が玉類を保有する割合や保有量が比較的大きい集団であったことを示す。下北方地下式横穴墓群は規模、構築位置、埋葬時期に関して相違が認められ、造営集団の構成を反映する可能性が認められる。しかし、玉類を出土した7基には大型の地下式横穴墓の存在が目立つが、全体としては時期が古いことが玉類を副葬する比率の高さの直接的な要因であると思われる。以下では、目視による観察から出土した玉類の組成を概述し、注目すべき点を指摘する。



写真2 福岡県稻童21号墳出土の翡翠製勾玉

4号地下式横穴墓〔宮崎県教委1972〕は、5号地下式横穴墓と同様に、9号墳の周辺に構築された大型の地下式横穴墓で、一般的にはTK47式期に比定されている。ガラス小玉17点と半円形ガラス製品2点¹²⁾が出土した。ガラス小玉は紺色透明を呈する植物灰タイプのソーダガラス製で、引き伸ばし法で製作されたもの6点、黒色不透明を呈する高アルミナタイプのソーダガラス製で、引き伸ばし法で製作されたもの1点、黄緑色半透明を呈し、鋳型で再生されたもの10点である。

16号地下式横穴墓〔宮崎市教委2008〕は、前方後円墳である1号墳の周辺に構築された大型の地下式横穴墓で、5号地下式横穴墓と相前後する中期後半に比定される。滑石製白玉が82点出土している。滑石製白玉は製作地が非常に多い一方で、製作地を区別する指標に乏しいが、石材や法量は比較的まとまっている。

17号地下式横穴墓〔宮崎市教委2008〕も前方後円墳である1号墳の周辺に構築されているが、小型の地下式横穴墓で、出土した須恵器からTK47式期に比定される。ガラス小玉が318点出土している¹³⁾。すべて銅と錫酸鉛で着色された黄緑色半透明を呈し、高アルミナタイプのソーダガラス製である。引き伸ばし法で製作されている。直径2mm程度の小型品で、法量も揃っている。

20号地下式横穴墓〔宮崎市教委2010〕は独立して立地する小型の地下式横穴墓である。出土した須恵器からTK10式期に比定される。ガラス小玉が138点出土している。緑色味の強い淡青色半透明を呈するが、錫酸鉛は含有されず、銅のみで着色されたものと考えられる。高アルミナタイプのソーダガラス製で、引き伸ばし法で製作されている。

23号地下式横穴墓および24号地下式横穴墓〔宮崎市教委2015〕はともに独立して立地する小型の地下式横穴墓である¹⁴⁾。23号地下式横穴墓からはガラス小玉が3点出土している。赤褐色不透明を呈するいわゆるムチサラである。高アルミナタイプのソーダガラス製で、引き伸ばし法で製作されている。

24号地下式横穴墓からは勾玉3点、管玉22点、棗玉10点が出土している。管玉20点は軟質の緑色凝灰岩製で、平均値は全長20.85mm、直径4.40mmとなり、典型的な細長形の畿内系である。残りはすべていわゆる滑石製の玉類である。勾玉はすべて全長が30mmを超える大型品で、そのうち2点は石材、形状、法量が極めて類似した製作時からのセットであり、棗玉もセットであった可能性もある。管玉2点は全長の相違がやや大きいが、平均値は全長19.45mm、直径4.55mmとなり、典型的な細長形の畿内系である。滑石製で大型の勾玉や棗玉¹⁵⁾は出土が畿内～瀬戸内東部に集中し〔大賀2008〕、瀬戸内西部以西の地域では分散的な出土しか確認できないことから、入手の契機が注目される。以上の玉類はすべて中期前半に製作されたもので、5号地下式横穴墓よりも古い様相を示す。

組成に関して注目される点が二つ挙げられる。まず、立地からも5号地下式横穴墓と何らかの繋がりの存在が窺われる4号地下式横穴墓では、半円形ガラス製品という特殊な器物の出土が共通しており、偶然であるとは考え難い。築造時期の順序や副葬量から判断して、5号地下式横穴墓の被葬者が所有していたもの一部が分与された可能性が高いと思われる¹⁶⁾。もう一つは、4号地下式横穴墓以外の4基はすべて非常に整ったセットの玉類を副葬しているとともに、その構成要素が全く重複しない点である。すなわち、それぞれの被葬者は独自に、かつ比較的単純な経路で玉類を入手していると考えられる。4号地下式横穴墓に関しては、数量が少なく、組成もやや雑多なものである。半円形ガラス製品だけではなく、ガラス小玉に関しても5号地下式横穴墓からの分与を想定できる種類を含む。ただし、5号地下式横穴墓には全く含まれない種類もあるので¹⁷⁾、異なる経路で入手した玉類が混合された可能性がある。

②西都原 111 号墳および西都原 4 号地下式横穴墓

西都原 4 号地下式横穴墓〔日高 1958〕は甲冑等の豊富な副葬品が出土し、様相が類似する下北方 5 号地下式横穴墓としばしば対比されている資料である。また、直径 29.5 m を測る中型の円墳である西都原 111 号墳と一体的に構築されていることが確認された〔宮崎県教委 2007〕。両者の埋葬時期や被葬者間の関係に関する注目される。近年では、墳丘上の埋葬施設よりも地下式横穴墓の方が副葬品が優れていることや、時期的に先行することを根拠として挙げて、地下式横穴墓の方を中心的な埋葬施設であるとみなす見解が優勢となっている〔橋本 2014、宮崎県教委 2015、吉村・奥山 2016、東 2017〕。このような理解は、下北方 5 号地下式横穴墓の評価にも直結する問題である。それぞれの埋葬施設からは豊富な玉類も出土していることから、この観点からの判断に言及しておきたい。

西都原 4 号地下式横穴墓では、被葬者の頭部付近と想定されている位置から翡翠製勾玉 1 点と「碧玉」製管玉 16 点、そこから 50cm ほど離れて「青色ガラス丸玉」115 点、さらに出土位置は明記されていないが、「滑石」製の小型管玉 11 点と「淡青色ガラス小玉」64 点が出土している。

「滑石」製の小型管玉とされたものは風化で軟質化した緑色凝灰岩製管玉である。破損した状態で保管されているため、確認は困難であるが、出土したものがほぼすべて現存している可能性が高い。直径 5 mm 前後で、全長が 20mm を超える規格であったと考えられ、典型的な細長形の畿内系に帰属する〔大賀 2013 b〕。石材的な類似性も認められ、製作時からのセットであると考えられる。「青色ガラス丸玉」115 点のほとんどは紺色を呈する植物灰タイプのソーダガラスの大型品で、下北方 5 号地下式横穴墓出土品と同種類である。ただ、端面の研磨は明確となっており、副葬までの時間経過が相対的に長いことが窺われる。紺色のカリガラスや濃青色の高アルミナタイプのソーダガラスを数点ずつ含んでいる。「淡青色ガラス小玉」64 点は 60 点が現存しており、すべて紺色を呈する鋳型で再生されたガラス小玉である。翡翠製勾玉 1 点と「碧玉」製管玉 16 点は現存していないが、この管玉は記述や提示されたモノクロ写真から「滑石」製の小型管玉よりも硬質の素材で、太形の管玉であったことが判る。TK 23 式に出現する太身の碧玉製管玉、もしくはその材質転換形である滑石製管玉であった可能性が高い。

西都原 111 号墳では、最初に中央部で構築された第 1 主体に伴って、大量の玉類が出土している。概数で詳細は不明であるが、勾玉 4 点、管玉 29 点、ガラス小玉 1400 点以上が報告されている〔宮崎県教委 2007〕。実見では、勾玉 4 点は翡翠製 3 点とガラス製 1 点である。翡翠製勾玉は 2 点が N n 型で、下北方 5 号地下式横穴墓例と同様な経緯で入手されたものであるとは考え難い。管玉は 36 点が確認できた。意味的には、大型品 11 点と小型品 25 点に大きく二分できる。大型品は花仙山産碧玉製で、直径 8 ~ 9 mm 前後の太形品である。TK 23 式期に出現する典型的な山陰系の構成要素であるが〔大賀 2009〕、実際の生産量は奈良県曾我遺跡を代表とする畿内周辺の製作遺跡の方が多く、威信財に準じる装身具として配布された可能性が高い。当該の種類は片面穿孔への強い指向性によって特徴付けられているが、西都原 111 号墳は成立期に特徴的に出現する非対称な両面穿孔で作出されている。小型品には未定 C 群製の半島系、緑色凝灰岩製の北陸西部系や畿内系が混在する。いずれも西都原 111 号墳よりも古い時期に流通した伝世品である。ガラス小玉は 1500 点以上を確認することができ、大きく 3 種類に分類できる。約 2 / 3 は高アルミナタイプのソーダガラス製で、赤褐色不透明、黄色不透明、黄緑色半透明、淡青色などカラフルな構成となっている。約 1 / 3 は鋳型で再生されたガラス小玉で、黄緑色半透明と淡青色半透明が存在する。色調から高アルミナタイプのソーダガラスを選択的に素材としたものであることが想定される。鋳型で再生されたガラス小玉は、大型品の占める割合が高く、流通量も多い中アルミナタイプのカリガラスや植物灰タイプのソーダガラスが素材として利用さ

れた紺色のものが圧倒的に多い。それに対して、高アルミナタイプのソーダガラスを素材としたカラフルなものは中期後半にまとまって出土する傾向が認められ¹⁸⁾、西都原111号墳例とも調和的である。最後は、コバルト着色で紺色透明を呈する植物灰タイプのソーダガラス製であるが、出土数は100点未満である。西都原4号地下式横穴墓とは異なり、小型品に限定される。

西都原4号地下式横穴墓と西都原111号墳第1主体からそれぞれ出土した多量の玉類を比較した場合、注目すべき点として次の3点を指摘することができる。第一に、両古墳から出土した玉類は重複する種類がほとんど存在しない。第二に、それぞれの古墳から出土した玉類は、少なくとも主要な種類に関して、大きさ等も揃ったセットがまとまった量で存在している。以上の2点からは、二人の被葬者はともに玉類の入手において優位な立場にあり、かつ独自に玉類を入手したことが窺われる。第三の点として、TK23式に出現する太身の管玉のセットを組成する一方で、MT15式期～TK10式期に新出する各種の水晶製玉類などは全く含まない点で共通する点が挙げられる。すなわち、両古墳は下北方5号地下式横穴墓よりも時期的に一段階後出する後Ⅰ期に比定され〔橋本2014〕¹⁹⁾、かつ、少なくとも玉類の組成に関しては両古墳の間に明確な優劣や前後関係は認められない²⁰⁾。

結語

以上、下北方5号地下式横穴墓と周辺地域の墳墓から出土した玉類について分類的な検討を行い、それぞれの製作地や製作時期に関する判断を示すとともに、相互に比較した上で、考古学的な含意についても簡単に言及した。ただし、地域的な特質などまでに触れるためには、さらに広く資料を参照する必要があるが、紙幅の都合からここでは果たすことができなかった。あらためて検討の機会を持ちたいと思う。

註

- 1 下北方5号地下式横穴墓例以外では、前期後半の島根県月廻古墳、広島県中小田1号墳、福岡県稻元久保14号墳、中期後半の岡山県隨庵古墳、大分県川部Ⅰ区市道拡幅調査区1号箱式石棺墓、後期後半の愛知県十三塚3号墳、香川県緑ヶ丘古墳例である。下北方5号地下式横穴墓と隨庵古墳のみ2点の組で出土している。
- 2 中期に時期比定される古墳から出土した水晶製勾玉は福井県花野谷2号墳、鳥取県長瀬高浜3号墳、広島県三玉大塚古墳の各1点である。ただし、花野谷2号墳例は大型で丁寧に仕上げ研磨された精製品で、前期後半からの伝世品である。また、大分県勘助野地1号墳からも水晶製勾玉の出土が報告されているが、淡黄褐色半透明を呈する瑪瑙製の誤認である。
- 3 勾玉以外でも紫水晶製の玉が僅かに知られている。福島県餓鬼堂35号横穴墓や福岡県上ヶ原10号墳例は通有の山陰系の丸玉であると考えられるが、長野県森将軍塚古墳周辺1号集石から出土した切子玉は、扁平な四角錐台を底面で合わせた特異な形状を呈する点で留意される。
- 4 分類的な帰属を判断するために必要な精度の問題から、筆者自身が1／20mmの精度で計測したデータを使用した。
- 5 古墳時代前期併行期に遡る関連資料として、北海道常呂川河口遺跡884a号土壙墓例が挙げられる。しかし、当該例は時空的に孤立しているだけではなく、石材の色調がやや異なること、および他よりかなり大型品であることから、現状では区別しておきたい。ちなみに、最も周知されている瑪瑙製管玉であると思われる福岡県平原1号墓例は製作技法が全く異なる。
- 6 測定箇所の選択が完全にランダムとは言えないことから、この比率を過信することは避けなければならない。また、素材として利用されたナトロンガラスの中にマンガン消色のものが1点含まれていたが、現在のところ、オリジナル

な小玉としては大阪府風吹山古墳でのみ確認されているもので、日本列島では流入量が特に少なかったと考えられる種類である。

7 須恵器編年との対応関係は、中Ⅲ期がTK 216型式、中Ⅳ期がON 46型式を含むTK 208型式、後Ⅰ期がTK 23～TK 47型式であると考えているが、TK 23式期以前に関しては確実に埋葬時期を示す須恵器が検出されない事例が一般的で、その判断に拘泥するつもりはない。

8 当該の種類は片面穿孔への強い指向性によって周知されているが、非対称な両面穿孔のものを含む。特に、成立期に関しては、非対称な両面穿孔が先行して出現する可能性が高い。非対称な両面穿孔が占める割合が高いセットとしては、愛知県松ガ洞8号墳第2主体や三重県塚原古墳を確認している。

9 物見櫓古墳例は時期が降るだけではなく、丁字頭勾玉を含まず、全長が15mm未満の小型品のみであることから、他例とは背景が異なる可能性もある。

10 当該期の朝鮮半島でも、南海岸沿岸部～南西部の地域で出土する翡翠製勾玉はNn型を中心とする。流通に関わった当事者や意義が異なることが想定され、同列に評価することはできない。

11 翡翠製勾玉が1～2点しか出土していない事例の中にも、それが伝世品である場合は存在する。そうした場合は偶発的な伝世現象との判別が困難であることから、積極的には言及していない。それらを含めても、配布対象が限定的であるという傾向は揺らがない。

12 報告書では勾玉破片とされるが、誤認である。ただし、実見したのは1点のみである。

13 報告書では出土数は200点とされるが、これはおそらく概数を記したものである。ここでは実見した総数に従った。

14 他の5基からは距離的に離れて立地するが、いちおう一体的に理解しておく。

15 滑石製棗玉は、Nn型の翡翠製勾玉と同様に、新潟県糸魚川市周辺の玉作遺跡で集中的に製作されており、曾我遺跡のような畿内の玉作遺跡におけるまとまった製作は想定できない。

16 地下式横穴墓を含む広義の群集墳において、近接して立地する墳墓間で装身具が分与されたと考えられる事例は他にも指摘でき、例外ではないかもしれない。目的的な検討を必要とする重要な課題であると認識している。

17 下北方5号地下式横穴墓出土のガラス小玉はほとんどが大型品であるが、1点だけ小型品が含まれている。この組成上の偏りは、当時の調査精度の影響を受けている可能性もあることから、直径2mm程度の小型品の不在をあまり過信しないでおきたい。

18 大阪府珠金塚古墳北櫛や兵庫県宮山古墳第2石室が代表例である。

19 大賀〔2002〕ではともに中Ⅳ期に時期比定していたが、変更しておく。

20 現状、西都原111号墳が後出するという判断は、第1主体に伴う土器類を根拠としているようであるが、詳細は不明である。また、付言すれば、中心的な埋葬施設の認定に関しては、副葬品の多寡や質よりも、「築造の契機となる」という順序が優先されるべきであると考えている。

参考文献

大賀克彦 2002「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書V 清水町教育委員会
pp. 1 - 20

大賀克彦 2005「稻童古墳群の玉類について－古墳時代中期後半における玉の伝世－」『稻童古墳群』行橋市文化財調査報告書第32集 行橋市教育委員会 pp.286 - 297

大賀克彦 2008「成塚向山1号墳出土の玉類－滑石製品の出現と生産に関する認識を中心に－」『成塚向山古墳群』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第426集 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.499 - 516

- 大賀克彦 2009 「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究』 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター pp. 9 – 62
- 大賀克彦 2012 「古墳時代前期における翡翠製丁字頭勾玉の出現とその歴史的意義」『古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流通過程に関する研究』 平成 21 ~ 23 年度科学研究費補助金若手研究 (B) 研究成果報告書 富山大学人文学部 pp.49 – 60
- 大賀克彦 2013 a 「前期古墳の築造状況とその画期」『第 13 回播磨考古学研究集会の記録 前期古墳からみた播磨』 第 13 回播磨考古学研究集会実行委員会 pp.61 – 96
- 大賀克彦 2013 b 「玉類」『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学第 4 卷 同成社 pp.147 – 159
- 大賀克彦 2019 「手工業生産の展開と古墳の築造 – 玉生産を中心として – 」『第 24 回東北・関東前方後円墳研究会大会シンポジウム 手工業生産と古墳時代社会』東北・関東前方後円墳研究会 pp. 1 – 19
- 橋本達也 2014 「西都原 4 号地下式横穴墓出土の装身具」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第 10 号 宮崎県立西都原考古博物館 pp.50 – 57
- 東 憲章 2017 『古墳時代の南九州の雄 西都原古墳群』シリーズ「遺跡を学ぶ」121 新泉社
- 日高正晴 1958 「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』第 43 卷第 4 号 日本考古学会 pp.16 – 33
- 宮崎県教育委員会 1972 『宮崎県文化財調査報告書』第 16 集 宮崎県教育委員会
- 宮崎県教育委員会 2007 『西都原 173 号墳 西都原 4 号地下式横穴墓 西都原 111 号墳』特別史跡 西都原古墳群発掘調査報告書第 6 集 宮崎県教育委員会
- 宮崎県教育委員会 2015 『西都原古墳群総括報告書』 宮崎県教育委員会
- 宮崎市教育委員会 2008 『下北方 1 号墳周辺遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 71 集 宮崎市教育委員会
- 宮崎市教育委員会 2010 『下北方塚原第 1 遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 78 集 宮崎市教育委員会
- 宮崎市教育委員会 2015 『下北方花切第 2 遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 106 集 宮崎市教育委員会
- 吉村和昭・奥山誠義 2016 「西都原 4 号地下式横穴墓出土の短甲について」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第 12 号 宮崎県立西都原考古博物館 pp.11 – 50
- Oga, K., Tamura, T. 2013. Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical Compositions, Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in the Yayoi – Kofun Periods (3 th Century BCE – 7 th Century CE) . Journal of Indian Ocean Archaeology, 9.
- Center for Research and Training in History, Archaeology & Palaeo – environment · Indraprastha Museum of Art and Archaeology pp.35 – 65